平成22年4月20日　　第１５号

市川を調べる

編集　市川を調べる会（会長・星　一郎/事務局・木村隆一）
発行　八戸市立 市川公民館（ 館 長　氣 田　武 男 ）

高屋敷の今昔①

高屋敷　　氣田武男

〈 高 屋 敷 の 変 遷 〉

1. 歴史への登場

高屋敷村は、戦国時代には名久井城主**東政勝**の所領であったが、それより古い時代から数戸が集落をつくり、畑作を主とした農耕を行っていたものと思われる。山裾の高いところに村の長が居を構えたことから**「高屋敷」**と呼ばれたのではないだろうか。

戦国の元亀2年（1571）に高屋敷村はじめ、上・下市川村など12ヶ村は、乱世の戦いに勝利した根城南部**八戸政栄**の支配下におかれた、と記録にある。その後、根城南部氏が遠野に**移封**（国替え）された寛永４年（1627）以降は、幕末まで盛岡藩領とされた。

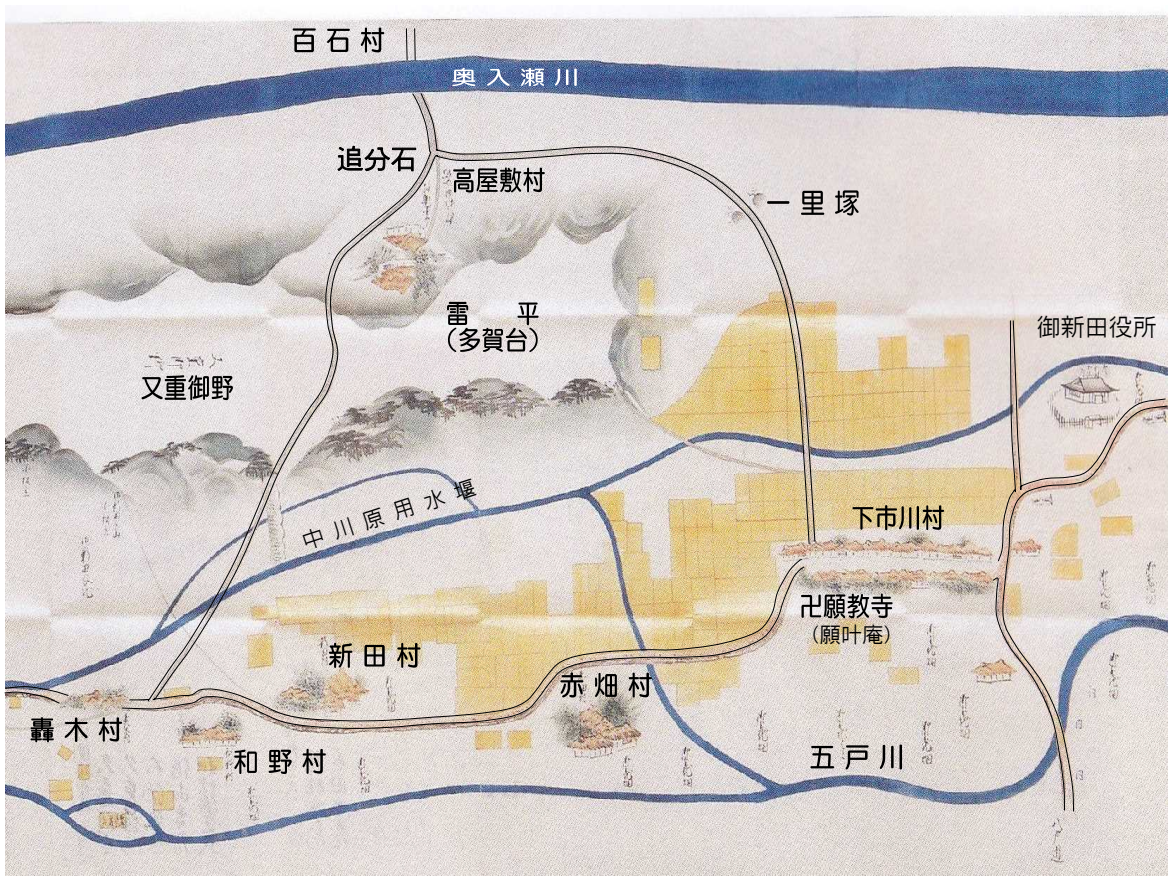
高屋敷村は、江戸時代の初めころは下田村や百石村などと同じように、**北郡**（明治に上北・下北に分かれる）に組み込まれていたが、その後、五戸代官所管轄の三戸郡下市川村の枝村とされた。

2. 河岸の賑わいと戸数の増加

享和3年（1803）の「御領分中本枝村付並位付下巻」には、「高屋敷　山際　7軒」とあり、山際の比較的高い所に集落をつくっていたようである。明治9年（1876）青森県刊行の「**新撰陸奥国誌**」には、「高屋敷　戸数14軒　人員83人　男42人　女41人」とあり、約70年間に戸数が2倍に増えている。

奥入瀬川と五戸川の合流部が海際に移動し、湊としての利用が可能となった文政12年（1829）、諸荷物積出湊として指定されると、市川湊には北浜海岸の〆粕や五戸・藤島（十和田市）方面からの大豆等が集まり、賑わいを見せた。市川湊に近い高屋敷でも、荷物の集積や船積みが行われて賑わうようになった。（現在、高屋敷には**船場川原**の字名が残っている。）　この賑わいに伴って移住して来る人もあり、戸数が増えていったものと思われる。

五戸市川新田図に見える高屋敷



〈嘉永元年（1848）作成。原図は盛岡市中央公民館所蔵〉

3. カンベヤと木村秀吉氏

このころ、移住してきた使用人を雇った**小笠原勘兵衛**氏（屋号カンベヤ）は、商売が繁昌し、「千手観音堂」を所有する〈明治7年青森県社寺境内詳細書上控帳、現在は戸舘七郎家所有）など、**市川新田肝入**（**肝煎**＝村長）〉としても活躍した。

また、明治の末ごろ五戸から母親と共に移住してきた**木村秀吉氏**（明治31～昭和48）は、月謝免除で百石高等小学校に入り、大正13年に卒業するまで高屋敷で育った。後に大阪で「木村鉛鉄化学機械株式会社」（現在:木村化工機株式会社）を創設した。木村秀吉氏は、昭和32年、長者番付全国第4位、個人納税で日本一と、我が国でも屈指の大実業家に大成した。愛郷心旺盛な同氏は、恩返しとして高屋敷には墓地入口に門柱を寄贈、また、百石には育英資金や百石小学校図書館など、数々の寄付をされた。（以下、次号に続く。）

参考資料：「百石町誌」「五戸町誌」「北浜街道」「流れる五戸川」